

〈包装資材ミニ知識⑯〉

「紙バンド」について

ネクスタ株式会社

「紙バンド」は、丸網抄紙機で抄造したクラフト原紙をテープ状に切り、これを撲紐機で丸紐に加工したもの寸法に応じた本数だけ並列に接着加工した紙紐製の帶です。

農産物規格規程に定める米麦用紙袋のうち、袋口に紙バンドを用いて封緘するのが第1種紙袋で、紙バンドの「材料・形状・仕立て方」は以下の様に規定されています。

「材料」は、紙ひも8本を幅10mm以下に並列帶状に固着させたもので、引張り強さ68kg以上のものとする。

「形状」は、紙ひもを合成樹脂等で固着させ、紙ひもの太さが均一で、紙ひもに、たるみ・交さ・われ・のりむら・のりかすの付着・よごれ等の使用上の欠点がなく、無異臭・無害のものとする。

「仕立て方」は、まず袋口の裏側に、長さ約76cmの紙バンドを袋口から約3cmの箇所で袋口と平行に、かつ袋口の両端から約13.5cm出すように当てる。次に第1層または3層を袋口の両端から約1cm以内の箇所で縦に約3cm切り、紙バンドの上に折り返して糊貼りする。紙バンドは袋に完全に付いているものとする。



紙バンド（第1種紙袋）



・バンドシーラー使用前の紙バンド（ロール）

紙紐製バンドは、1954年（昭和29年）松沢檍太郎氏によって創案・試作されたのが始まりで、同年、太洋工業株が「ストリングバンド」の商標名で販売を開始しました。その後主に静岡県富士市周辺で製造が盛んになり、1959年にJIS制定されると当時の結束補強材の主流であった帶鋼に代わって爆発的に普及しました。

米麦袋にクラフト紙袋が初めて採用された1961年当時は袋口に黄ボールを当て綿紐を結び紐とした規格が第1種袋でしたが、仕立てを手加工にいらなければなりませんでした。その後紙袋の需要が急速に増え、安定供給するため機械加工のできる現在の紙バンド型が開発され1969年に第3種袋として採用されると急速に普及しました。1975年に綿紐型は規格から外され、代って紙バンド型が第1種紙袋となり現在に至っています。

紙バンドの特性として、袋口を封するのに①特別な機械設備が不要なこと ②人力により容易に安全に作業できること ③紙袋本体を汚したり損傷するおそれがないこと、等があり今では一般の保有米袋や精米袋にも広く使われています。